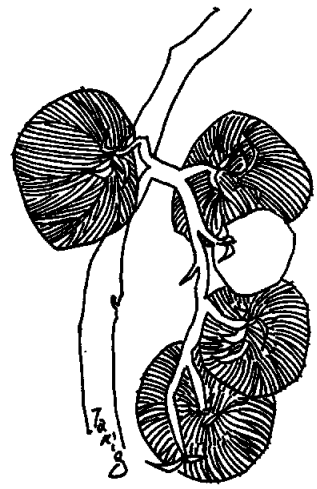

自然保護運動と教会

――地域社会のために働く教会のあゆみ――

斎藤義信

最近、ドイツから帰ってきた友人が、ドイツの教会事情をつぎのように書いている。

『ドイツの教会の沈滞は想像以上にひどい。日曜の礼拝に行っても出席はお年寄りばかりで、どこへ行っても若いのはせいぜい見習い牧師と私くらい。時折り十三才前後の子供が幾人かいるが、これは堅信礼前のお義理の出席。おまけに立派なパイプオルガンが恥ずかしくなるほど出席者が少ない。大学の神学部では学問的な進展がめざましく、ごく最近までは、自然科学以外の分野では神学が一番面白かったほどだが、これと逆に教会の日常活動は沈滞の一途。大抵の若者は教会のキの字もいわないし、まったくこれがキリスト教国かと思われるくらいである。

教会の沈滞を示すよい例として、最近、教会脱退者が全国的にふえてきたことである。教会脱退といっても別に信仰を捨てるというのではなく、要するに教会税を払わないことである。もともと信仰などをもっていないし、それなのに結婚や誕生や葬式にだけ世話になる教会に、税金を払うのはバカげていると思う人がどんどんふえてきて、いっそのことやめちまえ、というのがその最大の原因なのである。税金の高いドイツで、所得税の六%とか七%とかを毎月天引させられるのはかなわないと思うのであろう。しかしとにかく、中世からごく最近まで、この教会脱退というようなことを堂々とやりとげる勇気のある人間はいなかったし、考えられもしなかったのだから、教会と民衆がいかに離れているかおわかりであろう。

もっともこれらの事情は、お隣りのスイスでは大分ちがう。よくミュンスター（トウルナイゼンのいた大教会）をのぞいたが、ここはいつも満席である。バーゼルのプロテスタンティズムはカルヴィン派の極端なヒロイズムやルター派の妥協主義とちがって堅実で、中道をゆくツヴィングリ派の伝統が生きているからであろうか。教会が民衆の生活に密着していて、第一牧師の説教がドイツとはまったくちがう。バーゼルの説教は日常の具体的な政治問題にまではいりこんでくる。それも特別な政治問題だけではなく、婦人参政権（スイスは去年まで女性に選挙権がなかった）や、外人労働者の差別問題など、本当に市民の生活にむすびついたものなのである。教会がここまで具体的に市民の生活にはいりこんでいるからこそ、スイスの教会は生きているのであろう。』

このようにドイツの教会とスイスの教会では、教会の、社会へのかかわり方において大きくかわってくるという見方は、たしかにひとつの見解でしかないかもしれないが、現代の教会に対する的を得た分析である。

日本の多くの教会は、スイス的であるよりかは、むしろドイツ的な傾向を持って歩んできている。社会から遊離せざるを得ない多くの理由があったにしろ、むしろ遊離することを好んできたといえるであろう。この社会の中で生きられないゆえに、特殊社会を作ってその中に逃げ込んで生きようとする、信仰者の関心も、いかにしてこの世から脱け出すかというところにおかれている。そのような傾向の中に教会があったことは、否

定しきれないであろう。

遠浅の教会は、二〇〇戸足らずの小さな村にある小さな教会である。しかしこの小さな教会も、日本にある多くの教会と同じ悩みを持っていた。地域社会とはほとんど没交渉であり、地域社会とまったく遊離してしまっていたのである。それは、純農村にありがちな、反キリスト教ということからだけではないようである。教会のほうに地域社会から遊離を好むような傾向もあったようである。

しかし遠浅教会が、そもそものはじめから地域社会と遊離していたのではない。遠浅教会の歴史をふりかえってみると、この教会ほど地域社会にむすびついた教会も少ないと思えるほど、地域社会にむすびついていたのである。それは、この教会は遠浅酪農の開拓とほぼ同時に建てられたからである。

一九三〇年、昭和五年、いまから四〇年以上前に、現在の滝川市、新十津川町地区からやってきた酪農家によって、不毛の火山灰地といわれていた遠浅に開拓の鍬がおろされた。

入植当時は、旧式のトラクター二台を使って土地の整備にとりかかり、まる三年間は完全共同で開墾を行なった。この頃はわが国をおそった経済不況、それに乳業の不振、さらには土地が予想以上に悪かったために生産はふるわず、非常な苦しみをなめた。この地一帯に生えていたヨシを刈取り、推肥作りに積出し、積極的に地力の増進に力をそそいだほどだということである。

そして約十年目にいたって、一応、酪農経営でやってゆける自信を持つにいたった。しかしそうした小さな幸せもつかの間であり、その後、第二次世界大戦の戦局が悪化しはじめてから、作付統制令によって飼料作物の生産はひどい制限を受けると同時に、経営の中心となる人々が軍隊にとられ、さらには終戦時の社会的不安、経済的混乱などによって、大戦前、三〇〇頭を上回っていた乳牛も終戦時には一五〇頭に減少した。この困難にもめげず、こうした打撃から立ち直るため昭和二十二年、乳牛の改良を目ざして青年を中心に〝牛歩会〟が組織された。また昭和二十三年末には、乳の共同販売、牛の改良、母牛の管理をねらいとして遠浅酪農業協同組合が組織された。そして当時としては、国内では珍しい乳牛の人工受精事業をはじめたりして、組合は軌道に乗っていった。しかし、またもや大きな困難がふりかかってきた。

昭和二十六年、親組合の早来農協が赤字倒産の状態におちいったので、出資金の多かったこの組合は赤字負担のため、大きな打撃をうけた。それに加えて同じ年に、不良大豆粕の中毒事故が発生し、多数の優秀な乳牛を失ってしまい、またまた経済的に大きな被害をうけた。これだけの大きな痛手にもめげず、この相ついだ痛手を回復しようと昭和二十七年より、第一期、第二期と五カ年計画をたて、精力的にこれを実施し、近代的酪農経営の基盤を整備することができ、現代では、日本の酪農家の夢とも称される一大酪農郷をきずくにいたったのである。これだけの試錬にあいながらも、一人の脱落者も出さずに、すばらしい酪農郷をきずいてきた背後には、いくつかの理由を見つけることができる。

一、経営者能力の具備と高度の酪農技術の習得につとめたということ。

二、努力と耐乏が劣等地を豊土にかえたということ。

三、乳牛の資質と技術水準の向上につとめたということ。

四、良き指導者に恵まれたということ。

これらの理由はもっともなことだと思うわけであるが、精神面において教会のはたしてきた目に見えない働きを忘れてはならないと思う。開拓とほぼ時を同じくして、酪農家を中心とした人々によって教会が建てられたということが、何よりの証拠であろう。遠浅に入植した酪農家全員が信者であったわけではない。数のうえでは信者のほうがずっと少なかったのであるが、人々の精神を結び合わせるうえに大きな働きをしたのが、キリスト教であったのである。

遠浅の開拓に際して、当時、議会議員であり、デンマーク視察員の一人でもあった深沢吉平氏は「荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、さかんに花咲き、かつ喜び楽しみ、かつ歌う。」と聖書のことばを引用し、デンマークの例をあげ、信仰から生まれ出た信・望・愛をもって事業にあたるならば、たとえ火山灰地であろうとも、みんなの力ですばらしいものになるであろう、といって人々をはげましているのである。

このように地域社会とむすびついてきた教会もいつの間にか、知らず知らずのうちに地域社会とは離れてしまい、地域社会の人々は教会を、しきいの高い特殊社会のようにみるようになってしまった。実際に教会に集まってくる人々もごくかぎられた人々とな

り、しかも高年令層中心であり、将来に対して不安を覚えざるをえなかった。教会は悩み苦しんだ。教会は何もしなかったのではない。何もできなかったのである。

そのような悩める教会に、さらに追い打ちをかけるような出来事が起こった。苫小牧東部大規模工業開発のプランが打ち出され、土地の買収がはじまった。多くの人々が、移転ないし転職をせまられた。教会もその影響を受けた。教会の中心的メンバーの何人かを欠くことは、大きな痛手であった。さらに、教会の初期からの指導的立場にあった何人かを天に送ったことも、大きな痛手であった。教会にとってさらに大きな痛手は、牧師をも他のところへ送り出さねばならなくなったことである。教会にとっては危機でさえあった。

けれども教会は耐えた。新しき牧師を迎え、新しく歩み出した。この新しく歩み出した教会にとっての大きな課題のひとつが、地域社会との接触をいかにしてもつかということであった。子どものための日曜学校の強化、家庭婦人のためのお菓子作り講習会など、教会はいろいろなことを試みた。しかし何年もかかって地域社会と遊離してきた壁は、容易にとりのぞけなかった。

そんなときに工業開発の波は高まり、工業基地に隣接する遠浅をはじめ、早来町全体の人々が不安のうずに巻き込まれてしまった。いま、自分たちの住んでいるところは将来どうなるのであろうか?公害のたれ流しにあって、人間の住めないところになってしまうのではないだろうかという不安は、このうえなく大きなものになってきた。しかし具体的な行動はなんらとれないような状態であった。

このような状態のただ中で、教会は環境保全、自然保護のために具体的な行動を示唆し、その原動力となったのである。現在では早来町自然保護協会が設立され、その事務局は教会に置かれ、教会の役員が会長をしている。教会が自然保護の問題に積極的にとりくみ、住民運動に深くかかわっているということは、全国でもじつにまれなケースであろう。しかし、教会はこのことを通して地域社会と深くむすびつくことができ、むしろ教会にとってはすばらしいことであったのである。

教会と地域社会とがこのような形でむすびついていったということは、いくつかの理由が考えられるのであるが、そのうちの一つの大きなことはつぎのことであろう。

早来町という町はおもしろいというか、教育熱心というのであろうか、毎年、農業後継者の中から三〜四名を選んで、三重県の〝愛農学園〟というところに、いわば精神修養に町が経費を負担して送り出しているのである。農閑期に約半月間の短期大学に行ってくるだけであるが、参加者は一様に深い感銘を受けて帰ってくる。

この愛農学園というところは、聖書にもとづいて人間教育をなしているのである。これからの農業にたずさわるものは、技術的向上をめざすだけではなく、神を愛し、人を愛し、土を愛するという農業に対する精神的バックボーンがなければならないということで、精神教育に力を入れているのであろう。参加者が一様に、農業意欲をかりたてられてくると同時に、聖書に親しむ姿勢を与えられて帰ってくるということに、一種の驚ろきを覚えるのである。この愛農学園参加者は帰ってきてからも月に一度の割合で、例会を持ち聖書を読み、いろいろな話し合いをしている。聖書を読むという関係で、この集会に教会の牧師がまねかれるようになり教会と愛農同志会との間に接触が生まれた。

さらにこの愛農同志会のメンバーは、早来町農協青年部の中心メンバーでもあった。この農協青年部がいちはやく、早来町の今後について環境保全の問題に目ざめた。教会と農協青年部とが協力し、一九七二年三月二十五日(土)、東部工業開発に伴う早来町の将来――開発に伴う自然・生活環境保全について――という、講演会をもつにいたった。早来町の総人口は約六〇〇〇人であるが、この講演会には二五〇名もの出席があった。小さな町に大きな波乱を起こしたのであった。それだけ工業基地の建設がもたらす公害と住宅団地をあてこんだ農家の人たちの動揺が大きかったともいえるであろう。

そして「手遅れにならないうちに」という農協青年部、および教会の判断は間違っていなかったということになるであろう。また、講師にお願いした道自然保護協会の辻井達一北大助教授の、大気汚染が植物にもたらす影響などについての講演は、大きな感銘を与えるものであった。

この講演会をきっかけとして、町の壮年層が目ざめ、いろいろと協議・検討をした結果、五月二日(火)〝早来町自然保護協会〟を設立するにいたったのである。ただ話し合いの場を持つだけでなく、もっと高い次元から東部工業基地の建設問題ととりくむ必要があるということで、純然たる住民運動の一つとして同協会の設置に踏み切ったのである。最初にこの協会に加わった人々のうちで多数を占めたのが、牧場主であったというのも大きな特色であろう。

早来町は、日本でも有数な馬や牛の牧場がたくさんある、指折りの酪農地帯のひとつに数えられるのであるが、東部工業基地が建設されると、この緑豊かな田園風景の酪農地帯のど真中を百メートル道路が突き抜け、牧場はいくつにも分断されてしまう。加えて大気汚染によって酪農を営めなくなる恐れがあるので、「なんとかして、このすばらしい環境を守り抜きたい」と、牧場主が積極的に加わったということは、むしろ当然のことであったかもしれないのである。しかし、時とともに商工関係者や一般住民も多数この協会に加わり、町全体の住民運動になりつつあることはよろこばしいことである。

この協会は、設立されてまだ半年にもならないが、この間にじつにめまぐるしい活動をなしている。

一、道や環境庁に、町の自然保護を訴える要望書をいくつか提出した。「苫小牧東部大規模工業開発に伴い一大緑地設定のお願い」、「早来町酪農地帯の保護について」「早来町への視察願い」等。

二、早来シンポジウムの開催、北海道生産性本部「人間と環境の研究会」の絶大な協力を受け、開発関係者と、自然保護関係者と住民の対等な話し合いの場を設定するということで、この集会が企画され、「地域開発・環境・住民」という題でシンポジウムがもたれた。会場も、自然保護の問題が話されるのに、都会のビルの中ではあまりにも無味乾燥だということで、大自然のまっただ中、牧場の木立ちの中で開催された（七月二十五日（火））。参加者は約二〇〇名であったが、朝早くから夕方まで、じつに有意義な集会であった。開発側と保護側と住民の三者の話し合いを、実際に問題が起きる以前に行なったということは、全国でも始めての試みであったからか、後に、テレビで一時間番組でこの早来シンポジウムが報道されるなど、全道的に反響を与えた集会であった。このシンポジウムの報告書は立派なものが別途印刷されているわけであるが、この集会を終えてみて、私は一つの示唆を与えられた。

今後の自然保護の運動の展開の仕方は、ただ開発側に、ケンカ腰で反対をするだけであれば、結局は、両者が行き詰まってしまうのではないであろうか。両者（開発側と保護側）がじっくりと話し合って、新しいものを生み出す、生みの苦しみを味わわなければならないということ。これは今後の開発の問題においても同じことであろう。それゆえに早来式シンポジウムが全国の開発に先がけて、くりかえしくりかえし行なわれることが、かならず良き結果を生み出すであろう。

三、環境庁長官への陳情、八月二十九日（火）環境庁長官の来道に際し、早来町自然保護協会は直接に面会を求め、実状を報告し、早来町の自然環境保全のため尽力下さるよう依頼をした。

自画自賛がいくらでもつづくようであるが、下からわき上がってくるようなエネルギーに支えられて、早来自然保護協会が活動していることはたしかである。今後とも、さらに意欲的に、いろいろな問題にとりくんでいくであろう。

教会が特に地域社会との交流を求めて約二年たつわけであるが、地域社会と交流を深めるにつれ教会が生き生きとしてきていることは事実である。教会の目的が地域社会との交流にあるのではないが、教会が自分のおかれているすぐ隣りの人と仲良くできなくて、どうして平和を説くことができようか？これからの教会を考えるとき、教会は「こうあるべきだ」といっておしつけ的な態度をとりつづけるなら、現代の人々と心を通じ合うことができないで終わってしまうであろう。下からの力をも無視せず、この状況のただ中で、何をなしうるかと問いつづけるものでありたい。真実の姿を知っている者こそ、へりくだることができる者であろう。それと同時に、これからの自然保護の運動は個人の倫理性にたよるだけでは大きな進展を望めないであろう。

外国の公園には、ゴミが一つも落ちていないということである。それは掃除がいきとどいているから、というのではない。ゴミを捨てる人がいないからである。日本はどこへ行っても、空カンや紙クズの山である。この国民性の違いは一つには宗教心の違いということにあろう。キリスト教を背景とした宗教心に養われた人々の気持には、「たとえ誰も人が見ていなくとも、天の神さまは見ておられる。だから紙クズを捨てたりするのはやめよう」「神さまのつくられた美しい自然をよごすのはやめよう」という考えがおのずから身についているのであろう。「誰も見ていないからかまわないだろう。旅の恥はカキすてだ」という日本的感覚と、なんと違うことであろう。

今後、自然保護の運動が、人間教育の基本のひとつとして考えられなければならないであろう。目に見えないものを大事にする心を教会は率先して、人々の中に養うべくさらに努力すべきであろう。

（日本キリスト教会・遠浅教会牧師）